

第3回野菜需給・価格情報委員会における春キャベツ、春だいこんを
中心とした野菜の需給・価格見通しについての意見の概要

1 日時

平成21年2月27日(金) 14:00~16:00

2 場所

農畜産業振興機構 北館6階 大会議室

3 委員

別紙参照

4 概要

【秋冬野菜の需給・価格の状況】

(1) (前回の委員会での) 需給と価格の見通しと実績の違いとその要因

①冬キャベツ

ア 見通しでは、安定した出荷により入荷量は平年並みが見込まれ、価格は安値基調で推移するのではないかとされていた。

イ 実績は、全体として入荷量は平年を下回り、価格は全体としては平年を上回った。

ウ 見通しと実績の違いの要因は、主産地(関東、東海)における夏の局地的豪雨による定植の遅れなどが予想以上に大きく、11・12月は入荷量が平年(過去5か年平均をいう。以下同じ。)を大きく下回ったためである。

②秋冬だいこん

ア 見通しは、入荷量は平年以上が見込まれ、価格は、玉太りもよいことから安値基調が続くとされていた。

イ 実績は、入荷量は平年を大きく下回り、価格は、需要が期待以上に伸びなかったことから、全体としては平年を下回った。

ウ 見通しと実績の違いの要因は、主産地の千葉や神奈川での定植期の豪雨の影響などにより、特に11・12月の入荷の停滞が著しかったためである。

③秋冬はくさい

ア 見通しでは、一時的な集中出荷の懸念も想定しつつ平年並みとされ、価格は入荷の集中による低落状態が発生するのではないかとされていた。

イ 実績は、入荷量は全体として平年を下回り、価格は全体としては平年を上回った。

ウ 見通しと実績の違いの要因は、主産地の茨城での豪雨の影響などにより12月の入荷の停滞が著しかったためであり、価格は生育の遅れから、例年出荷のピークを迎える12月と1月の入荷が低調だったことなどから、約3ヵ月(11月中旬~2月上旬)にわたり堅調に推移したためである。

【春野菜の需給・価格見通し】

(1) 春キャベツ

(全般) 主産県は千葉、神奈川、愛知。作付状況は2月が温暖だったため前進傾向。今年は平年作を見込むが今後の天候次第では予定より少な目の出荷になることも考えられる。

(産地農協A)

- ・作付面積は前年と同程度の作付。
- ・生育状況は現在出荷されているものは、9月10日前後に播種されたもので、例年より10日ほど生育が早まっている。圃場では菌核病(温度、湿度の影響により発病)の発生が見られているが、出荷数量への影響は少ないと思われ、生育自体は概ね順調。
- ・出荷期間は2月中旬頃までは生育の前進により潤沢な出荷があり、例年3月に出荷されるものが減少する見込み。前年は4月下旬からピークに入ったが、本年はやや早まる見込み。
- ・出荷量は2月中旬頃までは、日量2～3万ケースの出荷。3月からは日量1万ケースを割る出荷を予想。4月中旬より3～4万ケースの出荷となり最盛期に入る見込み。

(2) たまねぎ

(全般) 主産県は佐賀、兵庫。佐賀は極早生への作付け移行が顕著で、現在の生育状況は、1月以降の低温、日照不足により、平年より1旬程度の遅れ。兵庫は11月の干ばつで若干遅れていたが最近の適雨、適温で回復傾向。

(産地農協B)

- ・作付面積は、「極早生」対前年比116%、「早生」同98%、「中生」同115%、「晩生」同75%。
- ・作付時期について、播種以降の天候良好で、病害虫少なく苗立ち良く、作付け予定の苗確保は平年よりやや良。極早生・早生の定植は、平年並みに順調に進んだが、中生・晩生は曇雨天により平年より1旬ほど定植時期が遅れた。
- ・生育状況は、曇天・日照不足により展葉が2枚ほど遅れ、平年より1旬ほど遅れている。また、曇雨天の影響で、2月頃よりボトリチス症の発生が県内各産地で散見され始めた。
- ・出荷時期は、平年並みの3月下旬頃より始まり、青切の早生が集中する5月上旬頃で出荷のピークとなる。早生収穫後は、貯蔵可能品種の出荷となり、計画的な出荷が行える。平年4月中旬以降の出荷量増加が本県の傾向であるが、本年は極早生への作付け移行により、4月上旬より出荷量増加が見込まれる。
- ・出荷量は前年対比110.6%。

(3) それ以外の品目

(春だいこん) 主産県の千葉は概ね順調。やや気温高めだったがこのところの曇天で平

年並みに戻る。4-5月が出荷のピーク。

(春はくさい) 4~5月は茨城、6月は長野中心の出荷。茨城は前年並みの生育状況。

(春レタス) 主産地は茨城、兵庫。長野は5月から。茨城は遅れていたが2月の気温高で平年並に。出荷ピークは3月下旬から4月下旬。

(春夏にんじん) 主産地は徳島、千葉。青森は6月から。暖冬傾向により生育は若干早め。出荷量は、小ぶりだった前年よりやや増加の見込み。

(4) 卸関係委員からの意見としては、

(春キャベツ)

- ・キャベツは、産地が小玉を前倒しで出したため、3月の入荷量はあまり多くなさそうであり、値もそこそこ出るだろう。
- ・全体の消費も鈍っており、内食の伸びは期待できるが、現在主流のバラ売り、カット売りの販売形態では価格的に大きな期待はできない。
- ・春系キャベツの生育は順調で入荷量も潤沢。気温の上昇で腐りの発生率が高くなり相場は不安定。冬系キャベツは大玉傾向の予想。
- ・品種の切り替わり時期に谷間が出来ることも予測される。

(たまねぎ)

- ・北海道産は昨年に比べて3~5千トン多く、4月いっぱい出荷される見込み。また、府県産の面積も前年より若干増、主力の佐賀の生育もよく、4月の出荷も昨年を上回る見込み。
- ・不況下で一層販売環境は厳しい。
- ・円高の影響で輸入ものが入る余地がある。
- ・減少傾向であった加工用が増えてきている。雨が多いと棚持ちが悪くなり国内産が高くなると一層輸入品が動く。

【野菜の消費動向に関する意見交換】

(1) 専門委員からの説明

- ・20~30代の主婦を対象とした生活情報誌を編集しているが、昨今、野菜に関する関心が高い。野菜に関する実用書が大変なベストセラーになっているのが象徴的。
- ・旬の野菜や伝統的な食のスタイルを取り入れやすい和食がブームとなっている。
- ・不景気の影響で「うち食」(=家庭で食べる食事)の傾向が高まり、考え方が変わってきている。
- ・主婦にとって、「安心・安全」に加えて「節約・使いきり」も大きなテーマで、これには大変な反響がある。特に、だいこん、白菜、キャベツは使いきりのアイデアで最も関心のある食材。
- ・今年は大変な鍋ブームで鍋本が売れている(5~6年前までは鍋の本は売れなかった)。

まさに今の「うち食」「節約」「野菜たっぷり」「簡単」といった志向にぴったりはまったようだ。

- ・ 色々なレシピの提案が消費拡大につながるポイント。

(2) 委員からの意見

- ・ 全体的に消費が鈍っているのできちんと戦略を立てて売っていく必要がある。
- ・ 地域密着で便利なコンビニで野菜を売ったり、儲かっているネット販売は生鮮野菜を取り扱っているものが多い。
- ・ キムチの消費が伸びている。また、昨今の米飯需要により、沢庵も売れている。
- ・ 円高の影響で、中国産野菜（一次加工品）を使う業者が増えている。
- ・ 消費の二極化を感じる。安心・安全を求めたり、付加価値のついたもの、ブランド等高いものを買う人と100円ショップで生鮮野菜を買うような人とではそもそも層が違う。
- ・ 食は文化。仕掛けられたからと言ってブームが作れるものがない。飽きてしまうということもある。
- ・ 日本人は忘れやすく、中国産野菜への嫌悪も数ヶ月しか続かない。
- ・ 消費者の志向も多様化しているためひと括りにはできない。

【本日の検討結果の取扱】

以上の検討結果のとりまとめについては座長に一任し、3月16日に開催予定の第6回野菜需給協議会に報告することとした。